

BAB III

HASIL TERJEMAHAN

3.1 Teks Asli

トイレの^{かみ}神さま

ぼくんちの トイレには、^{かみ}神さまが すんでいます。どんなすがたか
知らないけれど、すんでいるんです。

ぼくが ^{ちい}小さいころ、^{かあ}母さんは、ぼくに おしっこを させるのに
かならず、「トイレの^{かみ}神さま ごめんなさい」と、いってから パンツを
おろしてくれたんです。

でも、ぼくは、このことを すっかり わすれていました。おにいち
ゃんの ^{じけん}じけんが おころまでは。。

それは、^{あき}秋の^{ゆう}夕がたのことでした。

^{かあ}母さんは、^{だい}台どころで ^{ゆう}夕ごはんの ^{したく}したくをしていました。ぼくは、
おにいちゃんの ^{かえり}かえりをまっていた。げんかんの ^と戸があく ^{おと}音が
しました。

でてみると、おにいちやんが、ぼおっと、つつ^た立っています。「どこ
行^いったん。こうえんに 行^いったけど、おれへんかったやん。あそぼ」

「。。。。。。」

「なあ、あそんでえな」

「。。。。。。」

なにもいわないのです。じつと、^{あし}足もとを みつめたままです。

いつもなら、「ただいま」といって、あっちと こっちに くつを
ぬぎしらかして、ぼくのところに やってきます。そして、あたまをこづ
くか、「おれもいれてくれ」といって、いっしょに あそぶかします。

ぼくは、しんぱいになってきました。

^{だい}台ところの ^{かあ}母さんに、「^{かあ}母さん、おにいちやん、おかしいねん！

ちよっときて」と、いうと、「この、いそがしいのに なにやのん。はよ、
ここかたづけて、ごはんたべられるようにしてちょうだい。」と、^{かあ}母さん
は、いいながら げんかんにきました。

^{けんた}「健太、どないしたん。なんかあったん？」

「かずちゃんが。。。」と、おにいちさんは、やっと ^{くち}口をひらきま
した。

「かずちゃんが どないしたん？」

「。。。かずちゃんが。。。」

あとは、なきだしたので、^{かあ}母さんは、あわてて とびだしました。ぼ
くも ^{かあ}母さんの あとについて、^{そと}外にでました。

^に二けん^{さき}先が かずちゃんのいえです。

^{かあ}母さんと、かずちゃんの ^{かあ}母さんが はなしています。

かずちゃんは、^{いえ}家に あがらないで、げんかんに すわりこんだまま
ないていますないています。^{あし}足から ^ち血がでていました。

^{かあ}母さんは、いちど ^{いえ}いえにもどって、エプロンを ^{はず}はずしてきました。

「^{けんじ}健二、^{いえ}家にかえっときなさい。もうすぐ、^{とう}お父さんが、かえってき
はるから、ごはん ちょっと まっとなって、 ゆうとって。」

いいながら、母^{かあ}さんは、かずちゃんと かずちゃんの お母^{かあ}さんと
三人^{さんにん}で 行^いってしまいました。

三十^{さんじゅうぶん}分たっても 母^{かあ}さんは かえってきません。

外^{そと}は、すっかり くらくなっています。おなかが すいてきました。

おにいちゃんは ずっと 下^{した}をむいたまま、げんかんで すわって
います。

家^{いえ}の中^{なか}が、さむいかんじです。

それから、だいぶたって、母^{かあ}さんが かえってきました。「ごめんね。
おなかへったでしょう。すぐしたくするから。健太^{けんた}、まだ、ここにおっ
たん。さ、あがろ、あがろ。」

「母^{かあ}さん、おにいちゃん ぜんぜん しゃべらへんねん。あそんでも
くれへんし。どうしたん？」

母^{かあ}さんが、台^{だい}ところで うごきまわるのに あわせて、ぼくも うご
きながら、ききました。

「かずちゃんを、^じ自^{しゃ}てん車^の うしろに のせてあげてんて。そしたら、かずちゃん ^{ちい}小さいから、^{あし}足をうしろの ^{しゃ}車^りんに まかれたんやて。いま、びょういんに ^い行ってきたとこ。さあ、いそがな。」

なべから、ゆげが、たちはじめました。

^{とう}父^{さん}が かえってきました。

^{ゆう}夕^ごはんの ^{しょく}食^{たく}で、^{とう}父^{さん}は、おさけを のみながら ぼくたちにききます。

「きょうは、ええ子に しとったか？」

ぼくと、おにいちゃんは、^{した}下^ををむいて、だまっています。「きょうは、ふたりとも おとなしいやないか。^{けんじ}健^二、なんかゆうこと ないんか？」

いつもは、ぼくは、おにいちゃんとの ^{けんか}けんかのことを はなします。

いっしょに ゲームやビーだまをしていて、むちゅうになると、ぼくは、おにいちゃんに かなわないので、じゃんけんで、あとだしをしたり、おにいちゃんのを うごかしたりします。

すると、おにいちゃんは、「ずるいぞ！」と、いって、ぼくの あたまを おもいきり たたきます。

^{かあ}母さんは、あそんでいて、けんかをしたときは、たすけてくれません。

^{とう}父さんは、「おにいちゃんが、おとうとを たたいて、どうするんねん。ちょっとぐらい、こらえてやらな あかんで。」と喋ってくれます。

そうすると、おにいちゃんは、「そなん。けんじのほうがりわるいねんで！」と、こうぎしますが、^{とう}父さんの まえでは ぼくに^て手をだしません。

「え、どないしたんや。きょうは、おにいちゃんに あそんでもろたんか、けんじ。」

「ううん。」

おにいちゃんは、ひとことも しゃべりしません。

^{かあ}母さんが、^{けんた}「健太、かずちゃん、だいじょうぶやて。ほねにいじょうは、ないそうや。三はりほど ぬいたけど、びょういんに かようだけで、ええねんて。そんなに ^き気おとさんでも。でも、これからは、きをつけなあかんよ。小さい^{ちい}子を ^こうしろにのせるんは、やめなさいな。」と、喋って、^{とう}父さんには、きょうの できごとをはなしました。

「いちおう、わしも ようす みに行かなあかんかな。」

「おおげさになりますさかい、よろしいですやろ。かずちゃんの お
母^{かあ}さんは、いつも あそんでくれて よろこんでますって、ゆうてはった
わ。なんやしらんけど、かずちゃん、健^{けんた}太になつてますねんて。健^{けんじ}二
とやったら、けんかして、あそんでやれへんのに。」

そんな はなしをしながら、父^{とう}さんも、母^{かあ}さんも、おにいちゃんを
しかる けはいは ありません。おにいちゃんが、げんきをなくしてしま
ったからでしょうか。

あくる日^ひも、そのつぎの日^ひも おにいちゃんは、家^{いえ}にいました。それ
も、おとなしくしていました。ぼくと あそぶこともしません。なんだか、
家^{いえ}の中^{なか}が、火^ひがきえたようです。おにいちゃんが、おにいちゃんになくな
ったようです。

すこしくらいなら たたいてもいいから、もとの おにいちゃんに
もどってほしいです。もし、ずっと、このままだったら。。。。

ぼくは、トイレにかけこみました。トイレの神^{かみ}さまを おもいだした
からです。

トイレの でんとうに むかって、「トイレの ^{かみ}神さま おねがいが
あります。かずちゃんの けがが、はやく なおりますように。そして、
おにいちゃんが、げんきになりますように。」と、ひとりごとを なんど
も、なんども くりかえしました。

おにいちゃんは、すこしずつ げんきになってきました。

「おい、^{けんじ}健二」

「なに」

ぼくが、ふりむくと、「あほが^み見る。ぶたのけつ。」と、からかって、
わらっています。

おにいちゃんは、もとどおりになりました。

^{ふゆやす}冬休みのことです。

ともだちの家^{いえ}から かえってくると、ひるまなのに、父^{とう}さんが、かえ
っていました。

父^{とう}さんは、左手^{ひだりて}を 上^{うえ}にあげています。おやゆびに ほうたいが まい
てあって、血^ちがにじんできました。

父^{とう}さんの そばに よっていくと、「健^{けんじ}二、父^{とう}さん 会社^{かいしゃ}で けがし
 はってん。家^{いえ}の中^{なか}で うるそうしたら きずに ひびくから 外^{そと}であそ
 んでおいで。」母^{かあ}さんに いわれて こうえんに 行^いくことにしました。
 血^ちの ついた ほうたいを ^み見て、びっくりしました。なみだがでそうで
 す。のどの おくが いたいです。

こうえんは、さむくて、だれも あそんでいません。おにいちやんが、
 ブランコに すわっていました。

「おにいちやん、父^{とう}さん けがしたんやて。」

「うん、しってる。きかいに ゆびを はさまれて、おやゆびがなく
 なてんて。父^{とう}さん、かおしかめて かえってきたわ。いたいねんな。血^ちも
 ようけ にじんどったし。しばらく 会社^{かいしゃ}に行^いかれへんねんて。」

「ふーん。おやゆびが、なくなったんか。会社^{かいしゃ}に行^いかれへんねんやっ
 たら、どうすんの。」

「なにが」

「ごはん たべられるか？」

母^{かあ}さんが、おるやんか？」

つめたい風の中、ぼくとおにいちゃんは、ブランコで、時間をつぶしました。

家の中では、あそべません。父さんは、ときどき、かおをしかめています。それを見るたび、ぼくは、トイレにはいります。

「トイレの神さま。父さんが、はやくよくなって、会社に行けますように。ぼく、かしこくしていますから。おにいちゃんと けんかしないようにしますから。おねがいします。」

外で、あそぶのは、さむいし、おにいちゃんは、あそんでくれないし、じっとしているのも つまらないし、いつもより おおくトイレに はいることになります。

あまり しょっちゅう行くので、母さんが、しんぱいして、

「おなかの ぐあいでも わるいの？くすりのむ？」と、いうくらい、神さまに おねがいしています。

いつ、会社に行けるようになるねんやろか

ぼくは、しんぱいです。それに、もうすぐ お正月です。

おとしだまを もらったら、あたらしいゲームを かおうと、おもって
いたんです。だいじょうぶでしょうか。

おにいちゃんは、「しんぱいせんで、ええ。」と、いって、ぼくを
おいて あそびに行きます。

トイレに はいります。

「トイレの^{かみ}神さま、おとしだまは、だいじょうぶでしょうか。ちゃん
と もらえますように。そして、^{とう}父さんが、はやく ^{かいしゃ}会社に行けますよう
に。」おねがいしました。

^{かあ}母さんは、いままでと かわりなく、はなうたを うたいながら、^{だい}台
ところに ^た立っています。あまり のんきなので、きいてみました。

「だいじょうぶ。こどもの しんぱいすることとちがう。^{かあ}母さんが
ついてるやんか。いざというときは、^{かあ}母さんだって、はたらけるし。それ
より、おまえ、^{そと}外で あそんでおいで。^{いえ}家にばかりおらんと。」へいき
で、また うたいはじめています。^{かあ}母さんを見ていると あんしんです。
^{とう}父さんは、すこし ようすがちがってきました。

けがを、するまえは、^{いえ なか}家の中で、ドタンバタンと おにいちゃんと
あばれていても、「^{おとこ こ}男の子は、これくらいでないと あかん。」といっ
て いたのに、このごろは、「うるさい！」と、ひとこと どなります。

けんかしたときも いままでは、おにいちゃんが、しかられていたの
に、いまは、ぼくもしかられます。

もう、おとうとだからと 言って みかたになってくれません。

ぼくは、トイレに行きます。^いぼくが、ひとりになれるのは、ここしか
ないのです。

そして、とびらに ^{ちい}もたれて 小さなこえで、はなします。

「トイレの^{かみ}神さま。^{とう}父さんは、このごろ すこし おこりっぽいんです。
どうしてでしょう。このあいだは、^{とう}父さんと^{かあ}母さんが、けんかをしていま
した。なんで けんかをしたのか しらないけど、あんなに^{おお}大きなこえを
だして、いいあっているのを見たのは、はじめてでした。ぼくは、ふすま
の ^かかげで ^じじっとしていました。はやく ^ききずがなおって、^{かいしゃ}会社に行っ
てくれないと、また、^{とう}父さんと^{かあ}母さんが、けんかしそうです。いやです。」

トイレの^{かみ}神さまのおかげで ぼくは、すこしのことなら いやなことでも がまんでできるようになりました。

おにいちゃんが あそんでくれなくても ^{とう}父さんが、ぼくのみかたを してくれなくなっても、へいきです。

いやなことでも、くやしいことでも トイレの^{かみ}神さまに はなすと、もやもやが すーっとします。

^{かあ}母さんは、あいかわらず ^{だい}台ところで うたをうたっています。

^{かあ}母さんは、なにがあっても へいきです。

どこの^{くに}国の うたか知らないけれど、よく このうたを うたっています。

「ケ．セ．ラ．セラ」って。このまえ、^{とう}父さんと けんかしたあとも そうでした。

♪ケ．セ．ラ．セラ

なるように なる♪♪ って、やってました。ぼくも^{くち}口ずさみたくなる うたでした。

トイレにはいるたびに まだまだ 父さんのことは、おねがいしています。

ほうたいに 血がにじまなくなりました。もうすこしです。

トイレで きづきました。

スリッパが、きちんと むこうむきに そろえて ぬいであるのです。これまで なんかいも はいって きがつかなかったけど はじめて、
足もとを 見ました。

そういえば、ときどき すっと スリッパが はけていました。だれ
だろう きちんとしているのは？

おにいちゃんではありません。

おにいちゃんのあとは、いつも スリッパが あっちと こっちで
けんかしているんです。

父さんかな？ 母さんかな？

スリッパが、むこうむきになってるってことは.

“あつ、母さんだ！ きっと、母さんに ちがない。ぜったいだ！”

とう
父さんが、トイレにはいったとき、ぼくは まっていました。とう
父さん
のスリッパのあとを ^み 見るために。

とう
父さんのあとは、スリッパは、こちらむきに、そろっていました。

やっぱり ^{かあ} 母さんだった。

^{かあ} 母さんも トイレの^{かみ}神さまと はなしをしていたんだ。

だって、トイレに^{かみ}神さまがいるのをおしえてくれたのは ^{かあ} 母さんだし、なにが あっても、いつもへいきで いてるし。かずちゃんは、すっかり よくなったし、ぼくたちは、げんきだし、^{とう} 父さんも. . . .

そうか、^{かあ} 母さんもか。おなじだったんだ。

^{かあ} 母さんのいる ^{だい} 台ところに とんでいきました。

うたごえが きこえます。

「か あ さ ん。」

^{かあ} 母さんの ^か おを見て、^み にやりとしました。

「どうしたん？」

母^{かあ}さんは、ふしぎそうに ぼくを見^みます。なんだが、うれしいきぶん
です。かおが、かってに わらいます。

「けったいな子^こやな。」と、いって、母^{かあ}さんは しごとを つづけて
います。

やっぱり、ぼくんちには、トイレに神^{かみ}さまが すんでいました。ぼく
と母^{かあ}さんの神^{かみ}さまが、すがたは見^みせてくれないけれど すんでいるんで
す。

父^{とう}さん、よくなりました。おこる かいすうも へりました。

ほうたいは、まだ しばらく とれないけれど、そろそろ 会社^{かいしゃ}に行^い
こうかと、母^{かあ}さんと はなしていました。

ぼくは、うすぐらい せまいへやで、ひとり はなしを するのが
くせになりそうです。

3.2 Teks Terjemahan per Kalimat

トイレの^{かみ}神さま

Dewa Toilet

ぼくんちの トイレには、^{かみ}神さまが すんでいます。

Di toilet rumahku tinggalah seorang dewa.

どんなすがたか しらないけれど、すんでいるんです。

Dia tinggal di situ, tapi bagaimana sosoknya aku tidak tahu.

ぼくが ^{ちい}小さいころ、^{かあ}母さんは、ぼくに おしっこを させるのに かならず、「トイレの^{かみ}神さま ごめんなさい」と、いってから パンツを おろしてくれたんです。

Waktu aku kecil, untuk membantuku buang air, ibu selalu berkata, “Permisi Dewa Toilet,” lalu menurunkan celanaku.

でも、ぼくは、このことを すっかり わすれていました。

Tapi, aku telah melupakan semua hal tersebut.

おにいちゃんの ^{かみ}じけんが おころまでは。。。。

Sampai suatu peristiwa terjadi pada kakakku...

それは、^{あき}秋の^{ゆう}夕がたのことでした。

Peristiwa itu terjadi saat sore hari di musim gugur.

母^{かあ}さんは、台^{だい}どころで 夕^{ゆう}ごはんの したくをしていました。

Ibu sedang menyiapkan makan malam di dapur.

ぼくは、おにいちゃんの かえりをまっています。

Aku menunggu kepulangan kakak.

げんかんの 戸^とがあく お^{おと}音がしました。

Terdengar suara pintu depan terbuka.

で
てみると、おにいちゃんが、ぼおっと、つっ^た立っています。

Ketika aku mencoba melihat keluar, kakak berdiri melamun.

「どこ行^いったん。こうえんに 行^いったけど、おれへんかったやん。あそぼ」

“Tadi pergi ke mana? Aku tadi ke taman, tapi kakak tidak ada. Ayo main!”

「。。。。。。」

“.....”

「なあ、あそんでえな」

“Ayo main!”

「。。。。。。」

“.....”

なにもいわないのです。

Kakak tidak berkata apapun.

じっと、^{あし}足もとを みつめたままです。

Kakak tetap diam dan hanya menatap kakinya.

いつもなら、「ただいま」といって、あっちと こっちに くつを ぬぎ
しらかして、ぼくのところに やってきます。

Kalau biasanya, kakak berkata “*tadai*ma¹” lalu melepas sepatu dan melemparnya ke sana ke mari dan datang menghampiriku.

そして、あたまを こづくか、「おれもいれてくれ」といって、いっしょに あそぶかします。

Setelah itu, berkata “Aku ikut bermain ya,” dan mendorong kepalaku dan mengajak bermain bersama-sama.

ぼくは、しんぱいになってきました。

Aku menjadi cemas.

^{だい}台ところの ^{かあ}母さんに、「^{かあ}母さん、おにいちゃん、おかしいねん！ ちよ
っときて」と、いうと、

Kepada ibu yang ada di dapur, aku berkata “Ibu, kakak aneh! Datanglah ke sini sebentar.”

¹ Salam yang diucapkan oleh orang Jepang ketika tiba di rumah

「この、いそがしいのに なにやのん。はよ、ここかたづけて、ごはんたべられるようにしてちょうだい。」と、母^{かあ}さんは、いいながら げんかんにきました。

“Ibu sedang repot, ada apa? Cepat selesaikan pekerjaan di sini, supaya kalian bisa makan malam dengan segera!” kata ibu sambil datang ke pintu depan.

「健太^{けんた}、どないしたん。なんかあったん？」

“Kenta, kamu kenapa? Apa yang telah terjadi?”

「かずちゃんが。。。。」と、おにいちゃんは、やっと 口^{くち}をひらきました。

“Kazuchan²...” kata kakak yang akhirnya membuka mulutnya.

「かずちゃんが どないしたん？」

“Kazuchan kenapa?”

「。。。。かずちゃんが。。。。」

“.....Kazuchan.....”

あとは、なきだしたので、母^{かあ}さんは、あわてて とびだしました。

Setelah itu, karena Kenta mulai menangis, ibu tergesa-gesa berlari keluar rumah.

ぼくも母^{かあ}さんのあとについて、外^{そと}にでました。

Aku juga mengikuti ibu keluar rumah.

² ~chan merupakan panggilan keakraban yang digunakan oleh orang Jepang kepada orang/teman/kerabat yang telah lama kenal dan dekat

に二けん^{さき}先が かずちゃんのいえです。

Dua rumah di depan kami adalah rumah *Kazuchan*.

かあ^{かあ}母さんと、かずちゃんの ^{かあ}母さんが はなしています。

Ibu sedang berbicara dengan ibunya *Kazuchan*.

かずちゃんは、家^{いえ}に あがらないで、げんかんに すわりこんだまま な
いています。

Tanpa masuk ke dalam rumah, *Kazuchan* tetap duduk di pintu depan dengan menangis.

あし^{あし}足から ち^ち血がでていました。

Darah keluar dari kakinya.

かあ^{かあ}母さんは、いちど いえにもどって、エプロンを はずしてきました。

Ibu kembali lagi ke rumah, melepaskan celemeknya.

「けんじ^{けんじ}、いえ^{いえ}にかえっときなさい。もうすぐ、お父^{とう}さんが、かえってきはる
から、ごはん ちよっと まっとってて、 ゆうとって。」

“Kenji, pulanglah ke rumah! Karena ayah tidak lama lagi akan pulang, katakan pada ayah untuk menunggu sebentar makan malamnya,”

いいながら、かあ^{かあ}母さんは、かずちゃんと かずちゃんの お母^{かあ}さんと ^{さん}三人
で 行^いってしまいました。

Kata ibu sambil pergi dengan *Kazuchan* dan ibunya *Kazuchan*.

さんじゅうぶん 三十分たっても 母さんは かえってきません。

Meskipun sudah 30 menit, ibu belum juga pulang.

そと 外は、すっかりくらくらしています。

Di luar telah benar benar gelap.

おなかが すいてきました。

Perutku lapar.

おにいちゃんは ずっと 下をむいたまま、げんかんで すわっています。

Kakak duduk di pintu depan, dan terus menunduk.

いえ なか 家の中が、さむい感じですよ。

Di dalam rumah rasanya dingin.

それから、だいぶたって、母さんが かえってきました。

Setelah itu, setelah agak lama, ibu pulang.

「ごめんね。おなかへったでしょう。すぐ したくするから。健太、まだ、ここにおったん。さ、あがろ、あがろ。」

“Maaf ya. Lapar ya? Segera Ibu siapkan. Kenta, kamu masih di sini? Ayo naik, naik!”

「母^{かあ}さん、おにいちゃん ぜんぜん しゃべらへんねん。あそんでもくれへんし。どうしたん？」

“Ibu, kakak sama sekali tidak berbicara apapun. Dia juga tidak mau bermain denganku. Kenapa?”

母^{かあ}さんが、台^{だい}ところで うごきまわるのに あわせて、ぼくも うごきながら、ききました。

Meskipun ibu bergerak mondar mandir di dapur, aku bertanya sambil bergerak mengikuti gerakannya.

「かずちゃんを、自^じてん車^{しゃ}の うしろに のせてあげてんて。そしたら、かずちゃん 小^{ちい}さいから、足^{あし}をうしろの 車^{しゃ}りに まかれたんやて。いま、びょういんに 行^いってきたとこ。さあ、いそがな。」

“Kakak memboncengkan Kazuchan di belakang sepeda. Kemudian, karena tubuh Kazuchan kecil, kakinya terjepit roda belakang. Sekarang, baru kembali dari rumah sakit. Ayo bergegas!”

なべから、ゆげが、たちはじめました。

Uap mengepul dari periuk.

父^{とう}さんが かえってきました。

Ayah telah pulang.

夕^{ゆう}ごはんの 食^{しょく}たくで、父^{とう}さんは、おさけを のみながら ぼくたちに ききます。

Di meja makan malam, ayah bertanya kepada kami sambil minum *sake*³.

³ Minuman keras; arak Jepang; minuman beralkohol dari beras

「きょうは、ええ子に しとったか？」

“Hari ini, apa kalian berkelakuan baik?”

ぼくと、おにいちゃんは、^{した}下をむいて、だまっています。

Aku dan kakak terdiam menunduk ke bawah.

「きょうは、ふたりとも おとなしいやないか。健二^{けんじ}、なんかゆうこと
ないんか？」

“Hari ini kalian berdua berperilaku baik kan? Kenji apakah tidak ada hal yang
ingin kamu ceritakan?”

いつもは、ぼくは、おにいちゃんとの けんかのことを はなします。

Biasanya aku bercerita mengenai pertengkaranku dengan kakak.

いっしょに ゲームやビーだまをしていて、むちゅうになると、ぼくは、
おにいちゃんに かなわないので、じゃんけんで、あとだしをしたり、お
にいちゃんのを うごかしたりします。

Kami bersama-sama bermain kelereng, game dan lain-lain, jika sudah keasyikan,
karena tidak bisa menandingi kakak, lalu melakukan undian dengan cara *jan-ken*⁴,
dan aku menggerakkan punyanya kakak.

すると、おにいちゃんは、「ずるいぞ！」と、いって、ぼくの あたまを
おもいきり たたきます。

Ketika aku melakukan itu, kakak berkata, “Curang!” lalu dengan kesal memukul
kepalaku.

⁴ suit; suten; undian ala Jepang dengan memainkan jari

^{かあ}母さんは、あそんでいて、けんかをしたときは、たすけてくれません。

Saat kami sedang bermain kemudian bertengkar, ibu tidak menolong.

^{とう}父さんは、「おにいちゃんが、おとうとを たたいて、どうするんねん。ちよっとぐらい、こらえてやらな あかんで。」といってくれます。

“Kakak, kenapa memukul adik? Kamu harus lebih sedikit bersabar!” kata ayah.

そうすると、おにいちゃんは、「そなん。健二^{けんじ}のほうが わるいねんで！」と、こうぎしますが、^{とう}父さんの まえでは ぼくに手をだしません。

Kemudian, “Tidak seperti itu, Kenji lah yang lebih nakal,” protes kakak tapi di depan ayah kakak tidak berani memukulku.

「え、どないしたんや。きょうは、おにいちゃんに あそんでもろたんか、^{けんじ}健二。」

“Hei, kenapa? Hari ini Kenji diajak bermain dengan kakak kan?”

「ううん。」

“Tidak.”

おにいちゃんは、ひとことも しゃべりしません。

Kakak tidak berbicara satu katapun.

母^{かあ}さんが、「健^{けんた}太、かずちゃん、だいじょうぶやて。ほねにいじょうは、ないそうや。三^みはりほどぬいたけど、びょういんにかようだけで、ええねんて。そんなに^き気おとさんでも。でも、これからは、きをつけなあかんよ。小^{ちい}さい子^こをうしろにのせるんは、やめなさいな。」と、いって、父^{とう}さんには、きょうのできごとをはなしました。

Ibu berkata,” Kenta, Kazuchan, tidak apa-apa. Kelihatannya tulangnya tidak patah. Meskipun mendapat tiga jahitan tapi baik-baik saja hanya perlu rawat jalan di rumah sakit. Jangan terlalu khawatir seperti itu. Mulai sekarang, kamu harus hati-hati. Janganlah memboncengkan anak kecil di belakang,” kata ibu, kemudian ibu berbicara kepada ayah mengenai peristiwa hari ini.

「いちおう、わしもようすみに行かなあかんかな。」

“Setidaknya aku juga harus melihat keadaannya.” kata ayah.

「おおげさになりますさかい、よろしいですやろ。かずちゃんのお母^{かあ}さんは、いつもあそんでくれてよろこんでますって、ゆうてはったわ。なんやしらんけど、かずちゃん、健^{けんた}太になつてますねんて。健^{けんじ}二とやったら、けんかして、あそんでやれへんのに。」

“Karena nanti masalahnya akan menjadi besar, apakah ayah ingin itu? Kata ibunya Kazuchan, dia selalu senang jika Kazuchan diajak bermain. Meskipun tidak tahu pasti, Kazuchan akrab dengan Kenta. Meskipun jika dengan Kenji bertengkar dan tidak mau mengajak bermain.”

そんなはなしをしながら、父^{とう}さんも、母^{かあ}さんも、おにいちゃんをしかるけはいはありません。

Sambil berkata seperti itu, ayah dan ibu tidak bermaksud memarahi kakak.

おにいちゃんが、げんきをなくしてしまったからでしょうか。

Mungkinkah itu karena kakak murung?

あくる日も、そのつぎの日も おにいちゃんは、家にいました。

Di hari berikutnya, hari berikutnya juga, kakak ada di rumah.

それも、おとなしくしていました。

Selain itu, ia bersikap diam.

ぼくと あそぶこともしません。

Juga tidak bermain denganku.

なんだか、家の中が、火がきえたようです。

Entah bagaimana, di dalam rumah, sepertinya api padam.

おにいちゃんが、おにいちゃんではなくなったようです。

Kakak, seperti bukan kakak.

すこしくらいなら たたいてもいいから、もとの おにいちゃんに もどってほしいです。

Jika hanya sedikit, meskipun memukulku tidak apa-apa, aku ingin kakak kembali seperti dulu.

もし、ずっと、このままだったら。。。。

Jika terus seperti itu....

ぼくは、トイレにかけこみました。

Aku buru-buru masuk toilet.

トイレの^{かみ}神さまを おもいだしたからです。

Karena teringat kembali tentang Dewa Toilet.

トイレの でんとうに むかって、「トイレの^{かみ}神さま おねがいがあります。かずちゃんの けがが、はやく なおりますように。そして、おにいちゃんが、げんきになりますように。」と、ひとりごとを なんども、なんども くりかえしました。

Aku melakukan kembali tradisi di toilet, “Dewa Toilet, aku memiliki permohonan. Supaya luka Kazuchan cepat sembuh. Lalu supaya kakak menjadi bersemangat.” Aku berbicara sendiri dan mengulanginya berkali-kali.

おにいちゃんは、すこしずつ げんきになってきました。

Kakak sedikit demi sedikit menjadi bersemangat.

「おい、^{けんじ}健二」

“Hai, Kenji.”

「なに」

“Apa?”

ぼくが、ふりむくと、

Saat aku menoleh ke arahnya,

「あほが^み見る。ぶたのけつ。」と、からかって、わらっています。

“Orang bodoh nengok! Bokong babi!” kata kakak mengolok-olokku, lalu tertawa.

おにいちゃんは、もどおりにになりました。

Kakak kembali seperti semula.

^{ふゆやす}
冬休みのことです。

Liburan musim dingin.

ともだちの家^{いえ}から かえってくると、ひるまなのに、父^{とう}さんが、かえって
いました。

Saat aku pulang dari rumah teman, meskipun masih siang ayah sudah pulang ke rumah.

父^{とう}さんは、左^{ひだりて}手を^{うえ} 上^{うへ}にあげています。

Ayah mengangkat ke atas tangan kirinya

おやゆびに ほうたいが まいてあって、血^ちがにじんできました。

Jempolnya terbalut perban, dan darah merembes.

父^{とう}さんの そばに よっていくと、「健^{けんじ}二、父^{とう}さん 会社^{かいしゃ}で けがしはっ
てん。家^{いえ}の中^{なか}で うるそうしたら きずに ひびくから 外^{そと}であそんで
おいで。」母^{かあ}さんに いわれて こうえんに 行く^いことにしました。

Ketika aku pergi ke samping ayah, “Kenji, ayah terluka di kantor. Karena jika ribut di dalam rumah akan dapat mempengaruhi luka, mainlah di luar.” kata ibu, kemudian aku pergi ke taman.

血^ちの ついた ほうたいを ^み見て、びっくりしました。

Melihat darah yang melekat di perban aku terkejut.

なみだがでそうです。

Kelihatannya air mataku keluar.

のどの おくが いたいです。

Bagian dalam tenggorokanku terasa sakit.

こうえんは、さむくて、だれも あそんでいません。

Di taman dingin dan tidak ada yang bermain.

おにいちゃんが、ブランコに すわっていました。

Kakak duduk di ayunan.

「おにいちゃん、父^{とう}さん けがしたんやて。」

“Kakak, ayah terluka.”

「うん、しってる。きかいに ゆびを はさまれて、おやゆびがなくな
 くて。父^{とう}さん、かおしかめて かえってきたわ。いたいねんな。血^ちもよう
 け にじんどったし。しばらく 会社^{かいしゃ}に行かれへんねんて。」

“Ya, aku sudah tahu. Tangannya terjepit mesin, jempolnya putus. Ayah pulang dengan muka masam. Kesakitan. Darah pun banyak merembes keluar. Untuk beberapa waktu tidak bisa pergi ke kantor.”

「ふーん。おやゆびが、なくなったんか。会社^{かいしゃ}に行かれへんねんやったら、
 どうすんの。」

“Oo.. Jempolnya hilang ya? Bagaimana jika tidak bisa pergi kantor?”

「なにが」

“Apanya?”

「ごはん たべられるか？」

“ Apa bisa makan?”

「母^{かあ}さんが、おるやんか？」

“Bukannya ada ibu?”

つめたい風^{かぜ}の中^{なか}、ぼくとおにいちゃんは、ブランコで、時間^{じかん}をつぶしました。

Dalam angin yang dingin, aku dan kakak menghabiskan waktu di ayunan.

家^{いえ}の中^{なか}では、あそべません。

Aku tidak bisa bermain di dalam rumah.

父^{とう}さんは、ときどき、かおをしかめています。

Kadang-kadang ayah mengerutkan wajahnya.

それ^みを見るたび、ぼくは、トイレにはいります。

Saat melihat itu, aku masuk toilet.

「トイレの^{かみ}神さま。父^{とう}さんが、はやくよくなって、会社^{かいしゃ}に行^いけますように。ぼく、かしこくしていますから。おにいちゃんとけんかしないようにしますから。おねがいします。」

“Dewa Toilet. Aku mohon agar ayah cepat sehat dan bisa pergi ke kantor. Aku selalu bersikap sopan. Dan karena aku tidak akan bertengkar dengan kakak. Aku mohon.”

^{そと}外で、あそぶのは、さむいし、おにいちゃんは、あそんでくれないし、じっとしているのもつまらないし、いつもよりおおくトイレにはいることになります。

Bermain di luar dingin, selain itu kakak tidak mau bermain denganku, lalu aku merasa bosan berdiam diri, kemudian dibandingkan sebelumnya aku menjadi sering masuk toilet.

あまりしょっちゅう行くので、母^{かあ}さんが、しんばいして、

Ibu menjadi khawatir karena aku terlalu sering pergi ke toilet,

「おなかのぐあいでもわるいの？くすりのむ？」と、いうくらい、^{かみ}神さまに おねがいしています。

“Apa perutmu sakit? Mau minum obat?” demikian kata ibu, dan aku memohon kepada Dewa Toilet.

いつ、会社^{かいしゃ}に行^いけるようになるねんやるか

Kapan ayah bisa pergi ke kantor lagi?

ぼくは、しんばいです。

Aku khawatir.

それに、もうすぐ お正月^{しょうがつ}です。

Selain itu, sebentar lagi tahun baru.

おとしだまを もらったら、あたらしいゲームを かおうと、おもっていたんです。

Jika menerima *otoshidama*⁵, aku bermaksud hendak membeli *game* baru.

だいじょうぶでしょうか。

Apakah akan baik-baik saja?

おにいちゃんは、「しんぱいせんで、ええ。」と、いって、ぼくを おいで あそびに行きます。

Kakak berkata, “Jangan cemas,” saat akan pergi bermain denganku.

トイレに はいります。

Aku masuk toilet.

「トイレの^{かみ}神さま、おとしだまは、だいじょうぶでしょうか。ちゃんともらえますように。そして、父^{とう}さんが、はやく ^{かいしゃ}会社に行けますように。」おねがいしました。

“Dewa Toilet, apakah aku akan menerima *otoshidama*? Aku mohon agar bisa mendapatkannya. Kemudian, aku mohon supaya ayah bisa segera pergi ke kantor,” pintaku.

⁵ *otoshidama* adalah hadiah tahun baru; uang yang diberikan dari keluarga dan kerabat kepada anak-anak sebagai hadiah pada saat tahun baru

母^{かあ}さんは、いままでと かわりなく、はなうたを うたいながら、台^{だい}とこ
ろに 立^たっています。

Sampai sekarang ibu tidak berubah, berdiri di dapur sambil bernyanyi.

あまり のんきなので、きいてみました。

Karena ibu sangat santai, aku mencoba bertanya kepada ibu.

「だいじょうぶ。子^こどもの しんばいすることとちがう。母^{かあ}さんが つい
てるやんか。いざというときは、母^{かあ}さんだって、はたらけるし。それより、
おまえ、外^{そと}で あそんでおいで。家^{いえ}にばかりおらんと。」へいきで、ま
た うたいはじめています。

“Tidak apa-apa. Hal ini berbeda dengan kecemasanmu. Ibu akan mendampingimu. Ketika diperlukan, ibu juga bisa bekerja. Lebih baik kamu bermain di luar saja. Jangan di dalam rumah terus.” Dengan tenang, ibu mulai menyanyi lagi.

母^{かあ}さんを見^みていると あんしんです。

Saat melihat ibu seperti itu, aku menjadi tenang.

父^{とう}さんは、すこし ようすがちがってきました。

Ayah, kondisinya sedikit berubah.

けがを、するまえは、家^{いえ}の中^{なか}で、ドタンバタンと おにいちゃんと あば
れていても、「男^{おとこ}の子^こは、これくらいでないと あかん。」と
いたのに、このごろは、「うるさい！」と、ひとこと どなります。

Sebelum terluka, meskipun aku ribut dengan kakak dan berkelahi di dalam rumah dulu ayah berkata, “Anak laki-laki, tidak boleh seperti itu,” tapi akhir-akhir ini, “Berisik!” teriak ayah dengan satu kata.

けんかしたときも いままでは、おにいちゃんが、しかられていたのに、いまは、ぼくもしかられます。

Saat dulu bertengkar, hanya kakak yang dimarahi, sekarang aku juga dimarahi.

もう、おとうとだからと 言って みかたになってくれません。

Katanya karena aku sudah besar, ayah tidak membelaku.

ぼくは、トイレに行きます。

Aku pergi ke toilet.

ぼくが、ひとりになれるのは、ここしかないのです。

Hanya disini lah aku benar-benar bisa sendiri.

そして、とびらに もたれて 小さなこえで、はなします。

Kemudian, aku bersandar pada pintu, lalu berbicara dengan suara pelan.

「トイレの神さま。父さんは、このごろ すこし おこりっぽいんです。どうしてでしょう。このあいだは、父さんと母さんが、けんかをしていました。なんで けんかをしたのか 知らないけど、あんなに大きなこえをだして、いいあっているのを見たのは、はじめてでした。ぼくは、ふすまのかげで じっとしていました。はやく きずがなおって、会社に行ってくれないと、また、父さんと母さんが、けんかしそうです。いやです。」

“Dewa Toilet. Ayah akhir-akhir ini, sedikit mudah tersinggung. Kenapa? Waktu itu, ayah dan ibu bertengkar. Mengapa bertengkar aku tidak tahu, tapi bersuara keras seperti itu, aku pertama kali melihatnya. Aku terdiam di belakang pintu geser. Jika lukanya tidak segera sembuh dan tidak pergi ke kantor, keliatannya ayah dan ibu akan bertengkar lagi. Aku tidak suka.”

トイレの神さま^{かみ}のおかげで ぼくは、すこしのことなら いやなことでも がまんできるようになりました。

Berkat bantuan Dewa Toilet, jika hanya hal yang kecil meskipun tidak menyenangkan, aku menjadi bisa bersabar.

おにいちゃんが あそんでくれなくても 父^{とう}さんが、ぼくのみかたを してくれなくなっても、へいきです。

Meskipun kakak tidak mau bermain denganku dan ayah tidak menjadi pembelaku, aku baik-baik saja.

いやなことでも、くやしいことでも トイレの神さま^{かみ}に はなすと、もやもやが すーっとします。

Meskipun ada hal yang tidak disukai dan mengesalkan, jika berbicara dengan Dewa Toilet kekesalan di hatiku menjadi hilang.

母^{かあ}さんは、あいかわらず 台^{だい}ところで うたをうたっています。

Ibu seperti biasa menyanyi di dapur.

母^{かあ}さんは、なにがあっても へいきです。

Apapun yang terjadi, ibu tenang.

どこの国^{くに}の うたかしらないけれど、よく このうたを うたっています。

Aku tidak tahu dari negara manakah nyanyian itu, tapi ibu sering menyanyikan lagu ini.

「ケ. セ. ラ. セラ」って。

Yaitu [Ke..se..ra..sera]

このまえ、父^{とう}さんと けんかしたあとも そうでした。

Waktu itu, setelah bertengkar dengan ayahpun juga seperti itu.

♪ケ. セ. ラ. セラ

なるように なる♪♪って、やってみました。

♪Ke...se..ra..sera

naru youni naru ♪ ♪ itulah nyanyian ibu.

ぼくも口^{くち}ずさみたくなる うたでした。

Lagu yang juga saya ingin nyanyikan.

トイレにはいるたびに まだまだ 父^{とう}さんのことは、おねがいしています。

Ketika masuk toilet, aku terus memohon tentang ayah.

ほうたいに 血^ちがにじまなくなりました。

Darah tidak lagi meresap di perban.

もうすこしです。

Tinggal sedikit.

トイレで きづきました。

Aku tersadar di toilet.

スリッパが、きちんと むこうむきに そろえて ぬいであるのです。

Sandal dilepas dan diletakkan membelakangi pintu dengan rapi.

これまで なんかいも はいっていて きがつかなかったけど はじめて、
あし 足もとを み 見ました。

Sampai sekarang, meskipun sering masuk toilet aku tidak meyadarinya, baru pertama kalinya aku melihat kakiku.

そういえば、ときどき すっと スリッパが はけていました。

Kalau dipikir-pikir, aku kadang-kadang langsung memakai sandal.

だれだろう きちんとしているのは？

Siapakah yang telah merapikannya?

おにいちゃんではありません。

Bukan kakak.

おにいちゃんのは、いつも スリッパが あっちと こっちで けん
かしているんです。

Setelah kakak masuk toilet, sandalnya selalu berantakan di sana-sini.

とう 父さんかな？ かあ 母さんかな？

Apakah ibu atau ayah?

スリッパが、むこうむきになってるってことは.

Sandal yang diletakkan membelakangi pintu.....

“あつ、^{かあ}母さんだ！ きっと、^{かあ}母さんに ちがいない。ぜったいだ。”

“A.. Ibu! Pasti tidak salah lagi, ibu. Pasti”

^{とう}父さんが、トイレにはいったとき、ぼくは まっていました。

Saat ayah masuk toilet, aku menunggunya.

^{とう}父さんのスリッパのあとを ^み見るために。

Untuk melihat sandal setelah dipakai ayah.

^{とう}父さんのあとは、スリッパは、こちらむきに、そろっていました。

Setelah ayah, sandal menghadap ke pintu.

やっぱり ^{かあ}母さんだった。

Tidak salah lagi memang ibu.

^{かあ}母さんも トイレの^{かみ}神さまと はなしをしていたんだ。

Ternyata ibu juga berbicara dengan Dewa Toilet.

だって、トイレに^{かみ}神さまがいるのをおしえてくれたのは ^{かあ}母さんだし、なにが あっても、いつもへいきで いてるし。

Pasti, hal itu karena ibulah yang mengajarkan tentang keberadaan Dewa Toilet dan apapun yang terjadi ibu selalu tenang.

かずちゃんは、すっかり よくなったし、ぼくたちは、げんきだし、^{とう}父さんも. . . .

Kazuchan telah benar-benar membaik, kami semua sehat, ayah juga...

そうか、母^{かあ}さんもか。

Kalau begitu apa ibu juga?

おなじだったんだ。

Memang sama.

母^{かあ}さんのいる 台^{だい}ところに とんでいきました。

Aku bergegas menuju dapur tempat ibu berada.

うたごえが きこえます。

Terdengar suara nyanyian.

「か あ さ ん。」

“Ibuu...”

母^{かあ}さんの かお^みを見て、にやりとしました。

Melihat wajah ibu, aku tersenyum.

「どうしたん？」

“Kenapa?”

母^{かあ}さんは、ふしぎそうに ぼく^みを見ます。

Ibu melihatku dengan aneh.

なんだが、うれしいきぶんです。

Entah kenapa hatiku senang.

かおが、かってに わらいます。

Wajahku tertawa lepas.

「けったいな子やな。」と、いって、母^{かあ}さんは しごとを つづけていま
す。

“Anak aneh,” kata ibu, lalu melanjutkan pekerjaannya.

やっぱり、ぼくんちには、トイレに神^{かみ}さまが すんでいました。

Di rumahku memang tinggal sesosok dewa di toilet.

ぼくと母^{かあ}さんの神^{かみ}さまが、すがたは見^みせてくれないけれど すんでいる
んです。

Dewa kami, tidak memperlihatkan bentuknya tapi dia ada di sana.

とう
父^{とう}さん、よくなりました。

Ayah menjadi baik.

おこる かいすうも へりました。

Frekuensi kemarahannya pun berkurang.

ほうたいは、まだ しばらく とれないけれど、そろそろ ^{かいしゃ} ^い 会社に行こうかと、^{かあ} 母さんと はなしていました。

Meskipun perbannya untuk sementara belum bisa dilepas, tapi apakah akan segera pergi ke kantor, ayah berbicara dengan ibu.

ぼくは、うすぐらい せまいへやで、ひとり はなしを するのが くせになりそうです。

Tampaknya menjadi kebiasaanku berbicara sendirian dalam kamarku yang sempit dan redup.

3.3 Teks Terjemahan

Dewa Toilet

Di toilet rumahku tinggallah seorang dewa. Dia tinggal di situ, tapi bagaimana sosoknya aku tidak tahu. Waktu aku kecil, untuk membantuku buang air, ibu selalu berkata, “Permisi Dewa Toilet,” lalu menurunkan celanaku. Tapi, aku telah melupakan semua hal tersebut. Sampai suatu peristiwa terjadi pada kakaku...

Peristiwa itu terjadi saat sore hari di musim gugur. Ibu sedang menyiapkan makan malam di dapur. Aku menunggu kepulangan kakak. Terdengar suara pintu depan terbuka. Ketika aku mencoba melihat keluar, kakak berdiri melamun.

“Tadi pergi ke mana? Aku tadi ke taman, tapi kakak tidak ada. Ayo main!”

“.....”

“Ayo main!”

“.....”

Kakak tidak berkata apapun. Kakak tetap diam dan hanya menatap kakinya. Kalau biasanya, kakak berkata, “*Tadaima*,” lalu melepas sepatu dan melemparnya ke sana ke mari dan datang menghampiriku. Setelah itu, berkata, “Aku ikut bermain ya,” dan mendorong kepalaku dan mengajak bermain bersama-sama.

Aku menjadi cemas. Kepada ibu yang ada di dapur, aku berkata “Ibu, kakak aneh! Datanglah ke sini sebentar.”

“Ibu sedang repot, ada apa? Cepat selesaikan pekerjaan di sini, supaya kalian bisa makan malam dengan segera!” kata ibu sambil datang ke pintu depan.

“Kenta, kamu kenapa? Apa yang telah terjadi?” tanya ibu.

“*Kazuchan*...” kata kakak yang akhirnya membuka mulutnya.

“*Kazuchan* kenapa?”

“.....*Kazuchan*.....”

Setelah itu, karena Kenta mulai menangis, ibu tergesa-gesa berlari keluar rumah. Aku juga mengikuti ibu keluar rumah. Dua rumah di depan kami adalah rumah *Kazuchan*. Ibu sedang berbicara dengan ibunya *Kazuchan*. Tanpa masuk ke dalam rumah, *Kazuchan* tetap duduk di pintu depan dengan menangis. Darah keluar dari kakinya.

Ibu kembali lagi ke rumah, melepaskan celemeknya. “Kenji, pulanglah ke rumah! Karena ayah tidak lama lagi akan pulang, katakan pada ayah untuk menunggu sebentar makan malamnya,” kata ibu sambil pergi dengan *Kazuchan* dan ibunya *Kazuchan*.

Meskipun sudah 30 menit, ibu belum juga pulang. Di luar telah benar benar gelap. Perutku lapar. Kakak duduk di pintu depan, dan terus menunduk.

Di dalam rumah rasanya dingin. Setelah agak lama, ibu pulang. “Maaf ya. Lapar ya? Segera Ibu siapkan. Kenta, kamu masih di sini? Ayo naik, naik!” kata ibu

“Ibu, kakak sama sekali tidak berbicara apapun. Dia juga tidak mau bermain denganku. Kenapa?” Meskipun ibu bergerak mondar mandir di dapur, aku bertanya sambil bergerak mengikuti gerakannya.

“Kakak memboncengkan *Kazuchan* di belakang sepeda. Kemudian, karena tubuh *Kazuchan* kecil, kakinya terjepit roda belakang. Sekarang, baru kembali dari rumah sakit. Ayo bergegas!”

Uap mengepul dari periuk. Ayah telah pulang. Di meja makan malam, ayah bertanya kepada kami sambil minum *sake*.

“Hari ini, apa kalian berkelakuan baik?”

Aku dan kakak terdiam menunduk ke bawah.

“Hari ini kalian berdua berperilaku baik kan? Kenji apakah tidak ada hal yang ingin kamu ceritakan?” tanya ayah.

Biasanya aku bercerita mengenai pertengkaranku dengan kakak. Kami bersama-sama bermain kelereng, *game* dan lain-lain, jika sudah keasyikan, karena tidak bisa menandingi kakak, lalu melakukan undian dengan cara *janken*, dan aku menggerakkan punyanya kakak. Ketika aku melakukan itu, kakak berkata, “Curang!” lalu dengan kesal memukul kepalaku. Saat kami sedang bermain kemudian bertengkar, ibu tidak menolong kami.

“Kakak, kenapa memukul adik? Kamu harus lebih sedikit bersabar!” kata ayah. Kemudian, “Tidak seperti itu, Kenji lah yang lebih nakal,” protes kakak tapi di depan ayah kakak tidak berani memukulku.

“Hei, kenapa? Hari ini Kenji diajak bermain dengan kakak kan?”

“Tidak.”

Kakak tidak berbicara satu katapun.

Ibu berkata, “Kenta, *Kazuchan*, tidak apa-apa. Kelihatannya tulangnya tidak patah. Meskipun mendapat tiga jahitan tapi baik-baik saja hanya perlu rawat jalan di rumah sakit. Jangan terlalu khawatir seperti itu. Mulai sekarang, kamu harus hati-hati. Janganlah memboncengkan anak kecil di belakang,” kata ibu, kemudian ibu berbicara kepada ayah mengenai peristiwa hari ini.

“Setidaknya aku juga harus melihat keadaannya.” kata ayah.

“Karena nanti masalahnya akan menjadi besar, apakah ayah ingin itu? Kata ibunya *Kazuchan*, dia selalu dengan senang jika *Kazuchan* diajak bermain. Meskipun tidak tahu pasti, *Kazuchan* akrab dengan Kenta. Meskipun jika dengan Kenji bertengkar dan tidak mau mengajak bermain.” Sambil berkata seperti itu, ayah dan ibu tidak bermaksud memarahi kakak. Mungkinkah itu karena kakak tampak murung?

Di hari berikutnya dan hari berikutnya juga, kakak ada di rumah. Selain itu, ia bersikap diam. Juga tidak bermain denganku. Entah bagaimana, di dalam rumah, sepertinya api padam. Kakak, seperti bukan kakak.

Jika hanya sedikit, meskipun memukulku tidak apa-apa, aku ingin kakak kembali. Jika terus seperti itu....

Aku buru-buru masuk toilet. Karena teringat kembali tentang Dewa Toilet. Aku melakukan kembali tradisi di toilet, “Dewa Toilet, aku memiliki permohonan. Supaya luka *Kazuchan* cepat sembuh. Lalu supaya kakak menjadi bersemangat.” Aku berbicara sendiri dan mengulanginya berkali-kali

Kakak sedikit demi sedikit menjadi bersemangat.

“Hai, Kenji.”

“Apa?”

Saat aku menoleh ke arahnya, “Orang bodoh nengok! Bokong babi!” kata kakak mengolok-olokku, lalu tertawa. Kakak kembali seperti semula.

Liburan musim dingin. Saat aku pulang dari rumah teman, meskipun masih siang ayah sudah pulang ke rumah. Ayah mengangkat ke atas tangan kirinya. Jempolnya terbalut perban, dan darah merembes.

Ketika aku pergi ke samping ayah, “Kenji, ayah terluka di kantor. Karena jika ribut di dalam rumah akan dapat mempengaruhi luka, mainlah di luar!” kata ibu, kemudian aku pergi ke taman.

Melihat darah yang melekat di perban aku terkejut. Kelihatannya air mataku keluar. Bagian dalam tenggorokanku terasa sakit.

Di taman dingin dan tidak ada yang bermain. Kakak duduk di ayunan.

“Kakak, ayah terluka.”

“Ya, aku sudah tahu. Tangannya terjepit mesin, jempolnya putus. Ayah pulang dengan muka masam. Kesakitan. Darah pun banyak merembes keluar. Untuk beberapa waktu tidak bisa pergi ke kantor.”

“Oo.. Jempolnya hilang ya? Bagaimana jika tidak bisa pergi kantor?”

“Apanya?”

“ Apa bisa makan?”

“Bukannya ada ibu?”

Dalam angin yang dingin, aku dan kakak menghabiskan waktu di ayunan.

Aku tidak bisa bermain di dalam rumah. Kadang-kadang ayah mengerutkan wajahnya. Saat melihat itu, aku masuk toilet. “Dewa Toilet. Aku mohon agar ayah cepat sehat dan bisa pergi ke kantor. Aku selalu bersikap sopan. Dan karena aku tidak akan bertengkar dengan kakak. Aku mohon.”

Bermain di luar dingin, selain itu kakak tidak mau bermain denganku, lalu aku merasa bosan berdiam diri, kemudian dibandingkan sebelumnya aku menjadi sering masuk toilet. Ibu menjadi khawatir karena aku terlalu sering pergi ke toilet.

“Apa perutmu sakit? Mau minum obat?” demikian kata ibu, dan aku memohon kepada Dewa Toilet.

————— Kapan ayah bisa pergi ke kantor lagi? —————

Aku khawatir. Selain itu, sebentar lagi tahun baru. Jika menerima *otoshidama*, aku bermaksud hendak membeli *game* baru. Apakah akan baik-baik saja? Tapi kakak berkata, “Jangan cemas!,” saat akan pergi bermain denganku.

Aku masuk toilet. “Dewa Toilet, apakah aku akan menerima *otoshidama*? Aku mohon agar bisa mendapatkannya. Kemudian, aku mohon supaya ayah bisa pergi ke kantor,” pintaku.

Sampai sekarang ibu tidak berubah, berdiri di dapur sambil bernyanyi. Karena ibu sangat santai, aku mencoba bertanya kepada ibu.

“Tidak apa-apa. Hal ini berbeda dengan kecemasanmu. Ibu akan mendampingimu. Ketika diperlukan, ibu juga bisa bekerja. Lebih baik kamu bermain di luar saja. Jangan di dalam rumah terus.”

Dengan tenang, ibu mulai menyanyi lagi. Saat melihat ibu seperti itu, aku menjadi tenang.

Ayah, kondisinya sedikit berubah. Dulu sebelum ayah terluka, meskipun aku ribut dengan kakak dan berkelahi di dalam rumah, ayah hanya berkata, “Anak laki-laki tidak boleh seperti itu,” tapi akhir-akhir ini, “Berisik!” teriak ayah dengan satu kata. Saat dulu bertengkar, hanya kakak yang dimarahi, sekarang aku juga dimarahi. Katanya karena aku sudah besar, ayah tidak membelaku.

Aku pergi ke toilet. Hanya di sinilah aku benar-benar bisa sendiri. Kemudian, aku bersandar pada pintu, lalu berbicara dengan suara pelan.

“Dewa Toilet. Ayah akhir-akhir ini, sedikit mudah tersinggung. Kenapa? Waktu itu, ayah dan ibu bertengkar. Mengapa bertengkar aku tidak tahu, tapi bersuara keras seperti itu, aku pertama kali melihatnya. Aku terdiam di belakang pintu geser. Jika lukanya tidak segera sembuh dan tidak pergi ke kantor, keliatannya ayah dan ibu akan bertengkar lagi. Aku tidak suka.”

Berkat bantuan Dewa Toilet, jika hanya hal yang kecil meskipun tidak menyenangkan, aku menjadi bisa bersabar. Meskipun kakak tidak mau bermain denganku dan ayah tidak menjadi pembelaku, aku baik-baik saja. Meskipun ada hal yang tidak disukai dan mengesalkan, jika berbicara dengan Dewa Toilet kekesalan di hatiku menjadi hilang.

Ibu seperti biasa menyanyi di dapur. Apapun yang terjadi, ibu tenang. Aku tidak tahu dari negara manakah nyanyian itu, tapi ibu sering menyanyikan lagu ini.

Yaitu [Ke..se..ra..sera]

Waktu itu setelah bertengkar dengan ayah pun juga seperti itu.

♪*Ke..se..ra..sera naru youni naru* ♪ ♪, itulah nyanyian ibu. Lagu yang juga saya ingin nyanyikan.

Ketika masuk toilet, aku terus memohon tentang ayah. Darah tidak lagi meresap di perban. Tinggal sedikit.

Aku tersadar di toilet. Sandal dilepas dan diletakkan membelakangi pintu dengan rapi. Sampai sekarang, meskipun sering masuk toilet aku tidak meyadarinya, baru pertama kalinya aku melihat kakiku. Kalau dipikir-pikir, aku kadang-kadang langsung memakai sandal.

Siapakah yang telah merapikannya? Bukan kakak. Setelah kakak masuk toilet, sandalnya selalu berantakan di sana-sini. Apakah ibu atau ayah? Sandal yang diletakkan membelakangi pintu.....

“A.. Ibu! Pasti tidak salah lagi, ibu. Pasti”

Saat ayah masuk toilet, aku menunggunya. Untuk melihat sandal setelah dipakai ayah. Setelah ayah keluar, sandal menghadap ke pintu.

Tidak salah lagi memang ibu. Ternyata ibu juga berbicara dengan Dewa Toilet. Pasti, hal itu karena ibulah yang mengajarkan tentang keberadaan Dewa Toilet dan apapun yang terjadi ibu selalu tenang. *Kazuchan* telah benar-benar membaik, kami semua sehat, ayah juga...

Kalau begitu. Apa ibu juga berdoa dengan Dewa Toilet? Memang sama. Aku bergegas menuju dapur tempat ibu berada. Terdengar suara nyanyian.

“Ibu...” aku memanggil ibu dan ketika melihat wajah ibu, aku tersenyum.

“Kenapa?” Ibu melihatku dengan aneh. Entah kenapa hatiku senang. Wajahku tertawa lepas.

“Anak aneh,” kata ibu, lalu melanjutkan pekerjaannya.

Di rumahku memang tinggal sesosok dewa di toilet. Dewa kami tidak memperlihatkan bentuknya tapi dia ada di sana.

Ayah menjadi baik. Frekuensi kemarahannya pun berkurang.

Ayah dan ibu berbicara tentang kemungkinan apakah ayah akan segera pergi ke kantor, meskipun perbannya untuk sementara belum bisa dilepas. Sejak itu, tampaknya menjadi kebiasaanku berbicara sendirian dalam kamarku yang sempit dan redup.